

次のスライドから試行1が始まります。「試行1の終了です」というスライドまで音読を続けてください.

メロスは激怒した。

必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。

メロスには政治がわからぬ。

メロスは、村の牧人である。

笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。

けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

きょう未明メロスが村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。

メロスには父も、母も無い。

女房も無い。

十六の、内気な妹と二人暮しだ。

この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿として迎える事になっていた。

結婚式も間近かなのである。

メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。

先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。

メロスには竹馬の友があった。

セリヌンティウスである。

今は此のシラクスの市で、石工をしている。

その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。

久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。

歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。

ひっそりしている。

もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。

のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。

路で逢った若い衆をつかまえて、何かあったのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたって、まちは賑やかであった筈だが、と質問した。

若い衆は、首を振って答えなかった。

しばらく歩いて老爺に逢い、こんどはもっと、語勢を強くして質問した。

老爺は答えなかった。

メロスは両手で老爺のからだをゆすぶって質問を重ねた。

老爺は、あたりをはばかりの低声で、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」



「おどろいた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きょうは、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。

「呆れた王だ。生かして置けぬ。」

メロスは、単純な男であった。

買い物を、背負ったままで、のそのそ王城にはいって行った。

たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。

調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなってしまった。

メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」

暴君ディオニスは静かに、けれども威厳を以て問いつめた。

その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたように深かった。

「市を暴君の手から救うのだ。」

とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか？」

王は、憫笑した。

「仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ。」

「言うな！」

とメロスは、いきり立って反駁した。

「人の心を疑うのは、最も恥すべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑って居られる。」

「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」

暴君は落着いて呟き、ほっと溜息をついた。

「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

試行1の終了です.